

学校だより

11月号



やさしい子 たくましい子 考える子

黒門

発行日

発行者

令和6年10月31日

台東区立黒門小学校

校長 飯塚 雅之

読書に親しむ

校長 飯塚 雅之

食欲の秋、読書の秋、実りの秋、芸術の秋、スポーツの秋…。「〇〇の秋」にはいろんなものがあります。気候も過ごしやすくなって、食べ物もおいしい時期。いろんなことに打ち込める絶好の季節の到来です。

さて、秋の取組の中で、読書に一番適した季節であるということから由来する読書の秋。

中国・唐代の文人である韓愈が残した詩の中に「燈火親しむべし」という一節があります。その意味は「秋になると涼しさが気持ちよく感じられる。そんな秋の夜長はあかりをつけて本を読むのに適した季節である」ということで、韓愈が息子に対して勉強を勧めた言葉として知られています。

そして、この詩を夏目漱石が「三四郎」という作品に取り上げたことがきっかけで、「最適な季節の秋に読書をしよう」という風潮が生まれ、「読書の秋」と言われるようになりました。

随分前から子供の活字離れや語彙力のなさ、国語力の低下、対話による問題解決能力の低下などが指摘されてきました。

読書活動はこれらの能力を高めるだけでなく、豊かな心と確かな学力を育むための大切な取組としてより重要度を増しています。読書活動は子供が言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものです。



文化庁が実施した2023年度の「国語に関する世論調査」によると、16歳以上を対象とした調査で、1か月に1冊も本を読まない人が6割を超え、読書離れが急速に進んでいることが明らかになりました。また、読書量が減った理由については、「携帯電話、スマートフォンなどで時間が取られる」が43.6%で一番多いという結果でした。

今の時代は、テレビやゲーム、スマートフォンなど、読書以外に子供たちを魅了するものがたくさんあります。今の社会ではこれらを全て否定することはできません。ですから、なおさらこれらの使用方法をきちんと確認しながら、両者が上手に共存できる方法を探ることができるとよいと思います。

先日、図書室前で1年生に声を掛けられました。

「校長先生、『あらしのよるに』っていう本が図書室にあるよね。」「そうだね。」

「校長先生は、このお話知ってる？いいお話だよ。あのね、嵐の夜にオオカミとヤギが……。」

こんな会話が子供たちとたくさんできるといいなと思っています。みなさんで「読書の秋」を楽しんでみませんか。